

# 世俗世界における教会の共同の責任 (一)

竹 中 正 夫

## 序

キリスト者はそれぞれの状況の中にあって福音によって生きる人間である。彼はイエス・キリストの福音というかけがいのないそして変らない源泉に生命を得ている。しかし、キリスト者の生き方は決して一様ではなくそれぞれの時代や状況においてちがった形態をとっている。ちょうど同じ種を植えても、それがまかれた場所にしがって、多少ちがった花実をもたらすように、キリスト者の福音に対する応策の具体的な表現はその時代や状況によってことになっている。

このような観点から各時代におけるキリスト教倫理のたて方を吟味することは興味深いことであるばかりでなく、現在におけるわれわれのあり方を吟味する点においても参考になることである。

19世紀から今世紀のはじめにかけて人間の生き方を考えるにあたって、目的論的な考え方が支配的であった。崇高な目的をかかげ、理想的な共同社会の建設を旨としたロバート・オーエンのユートピア思想の中に、あるいは「新しい村」の設計を意図した武者小路実篤の試みの中にその例を見出すことが出来る。また、いわゆる社会的福音の運動の中にも共通な性格を見出すことが出来る。ラウシェンブッシュが1918年にイエール大学でなした「社会的福音の神学」をみるとその意図がつぎのように記されている。

「若し神学が社会的福音に十分な教義的基礎を与えるものであるなら、単に神の国の教理を取り扱うのみでなく、それに中心的な位置を与えねばならない」<sup>1)</sup>。

ここで注目すべきことは、神学が社会的福音を強化するための手段として考えられていることである。社会的福音は一つの社会的プログラムで、聖書とくに四福音書に記されたイエスの愛にもとづく社会秩序である。ラウシェンブッシュはその中に四つの要素を認めている。すなわち、(a)人格の最も自由な且つ最高の発展を保障する社会秩序、(b)法的な拘束より自由な愛が優先する社会秩序、(c)経済的資源および機構の私有独占の排除される社会秩序、(d)世界に平和と一致の行われる社会秩序の四つの点である。

こうした考え方は目的論的な理想の社会秩序を追求してゆく方法で、19世紀的な色彩が強かった。19世紀に発生したマルクス主義の中にも同じような性格を見ることが出来る。とくにマルクスは「階級なき社会」という言葉を用いて理想の社会を呼び、社会発展の目標を指示した。

第一次大戦を転換期として、人本主義的な理想主義に対する批判がなされ、人間の文化の危機が指摘されるようになった。ヘーゲル哲学の客観的な体系にプロテストをしたキュルケゴールや、人間の内的な実存的な葛藤をえがいたドストエフスキーは19世紀において、いち早く人間の危機的状況を指摘した預言者的存在である。スピングラーは「西欧の没落」<sup>2)</sup>において、成熟した大木に西日があたるさまになぞらえて西欧文明の凋落の姿をえがいている。このことは、神学の領域においてはいわゆる危機の神学において明確に表明された。人間が人間の力によって理想社会を来らせようとする楽観主義の誤りを説き、人間の状況における罪が明白にされ、人間はただ神のめぐみを受け入れること、すなわち神の言に聴従することによってのみ生きることが主張された。

われわれは、今日、祖父の時代の楽観的な目的論、父の時代の聖書の誠命論のあとをうけついでどのような時代にあるのであろうか。今日社会的な理想主義や、人間の能力に根ざした人本主義はキリスト教倫理の基盤として支持されていない。われわれは人間の限界性を祖父の時代よりも現実的にみつめているし、父の時代に危機の神学が聖書にかえれと叫んだことを忘れてはいない。しかし、聖書の誠命は「いま、ここ」という具体的な状況の中で聴従されるものであり、聖書に示されている神の啓示に現実の社会的状況の中にあって応答するという態度が強くなっている。状況に適合することはこの世に従属するこ

とであるが、倫理的決断は一定の内容をもっており、状況とのかかわりなしには決断は空拳をきるようなものとなる。われわれは、理想主義的な目的論に走るのでもなく、また抽象的あるいは形式的な誠命論を固執するのでもなく、聖書を全体として理解し、その光の下に自己のおかれている状況における人間としての生き方を探索する必要がある。いま現代の状況で産業社会における教會の共同の証を考えると、今日世界の教會がその交りの中で互に学びあいつつある諸点を確認するとともに、日本の産業社会における応答を考える参考にしたいと思う。

## 1 世俗の理解

はじめに、今日の世界の教會の交りの中で考究されつつある教會のこの世における責任理解について考えてみたいと思う。

エキュメニカル運動はますます広汎な領域にひろがっており、さまざまな問題が提起されているが、教會と産業社会の観点から次の三つの問題から最近の強調点をさぐってみることしたい。

第1には、教會の世界理解を具体的に深めてゆこうとする努力がある。教會は19世紀の世界におかれているのでもなければ、初代教會を理想化してその状況における宣教を考えることも出来ない。教會はありのままの、リアルな今日の世界を宣教の場として積極的に受けとめる必要がある。神は抽象的な世界や理想的な世界を愛されたのではなくありのままなるリアルな世界を愛されたのである。今日の世界には急激な社会的変化が行われており、西欧においては技術の発展に基づいてあらゆる社会生活が変貌し、アジア、アフリカなどでは非常に封建的な社会から近代的社会に移行しようとしている。その道程には民族の独立、人種的偏見からの解放、個人の尊厳の回復、技術の導入など顕著な変化がおきている。

このような状況において一方においては、宗教の復興運動がおきたり、新興宗教がひろがったりしているが、他方においては、この世界のことを宗教的支配から独立させて、あるがままに受けいれようとする世俗化 (Secularization) の傾向が存している。アジア、アフリカにおいては伝統的な宗教が世俗のこと

を圧迫し支配していたのでそれから自由になろうとする必要性がある。この場合われわれは、世俗化 (Secularization) と世俗主義 (Secularism) を区別することが、キリスト者のこの世理解において参考になると思う。世俗化は、宗教的権威によって、この世のことを律しようとするのではなく、ありのままのこの世界の姿を事物にしたがってとらえ、その中において、自由に、自己に託された責任を遂行する態度として考えてみる事が出来る。人間の自由と健全な成長をねがうものとして、この世界のさまざまな領域において、その領域に共通な言葉で、共同の責任を荷う態度を、世俗世界に生きる人間の態度ということが出来る。

これに反して世俗主義は、相対的なこの世の一部の力を絶対化し、人間の自由を否定し、人間を相対的なものに拘束し、奴隷化することを意味する。この世における唯物主義、金権主義、人間崇拜、組織至上主義などを世俗主義という事が出来る。

キリスト者は、世俗主義ときびしく対決する。(十戒の第一、第二の戒を参照、出エチ、20) 彼はいかなる時代、いかなる状況にあっても相対的なものを絶対化し、部分的なものを全体化するはたらきに「否」をとなえる。

理性を万能とし、科学を神の座におく科学世義をわれわれは支持しないが、合理的な精神をもって世俗の世界の赤裸々な分析と真摯な探索にあたる科学的な態度を積極的に支持しうるのではないかと思う。キリスト者はその信仰の基盤であるイエス キリストの出来事によって、いわゆる宗教的な領域の外にある世俗世界に対する神の深い愛を知るのである。「言が肉体となって宿った」という場所は、この世俗世界であり、イエスは宗教的聖者の子として宮殿に生れたのではなく、一介の働く人、ナザレの大工の息子として馬小屋に生れたのである。この点から英国の宣教運動の指導者である マックス・ウオーレンが「世俗」という言葉を次のように説明しているのは興味深い。

『世俗』とは、その奥底に『聖なるもの』が存在しており『聖なるもの』がわれわれの時代と世界においてあらわれる形態をいう。換言すれば、われわれの神は世俗世界において働く神であるという理解において、われわれは、キリスト教信仰におけるインマヌエルの神の理解をなしうるのである。そこ

において、われわれは、自分たちは世俗世界に住んでいると思っている人々に対して福音をもっているのである」<sup>3)</sup>。

昨年12月メキシコにおいて教会協議会の世界宣教部の会議が開かれたが、その四つの分科会の中の一つは、主として世俗世界における福音の伝達について考えた。そこにおいては、世俗主義の危険性に反対しながら、世俗化を否定せず、十分に理解し、その中での人間としての責任を共に背負ってゆこうと態度が強かった。こうした点から、これからますます産業がすすみ世俗化の傾向の強い大都市における教会の働きは、どういう形態をとるべきかということは重要な課題として認められ、今後世界教会協議会が産業社会における教会の働きを促進するために人材の教育や援助を積極的にすすめることになった。

もう一つ具体的な例をあげると、世界学生基督者連盟の機関誌であるSTUDENT WORLD (No. 1, 1963) によると「世俗化」(Secularization) についての特集号があり、主として1962年夏にオーストリアのグラッツで開かれた会議の記録をのせている。この中には主題についてのいくつかの講演の外に、学生達が世俗化した時代において守る礼拝 (Worship in a Secular Age) についての具体的な例が示されている。世俗時代において、キリスト者が集ったときにはどのような礼拝を守るかといって問題がそこでは試験的に語られており、いくつかの例が示されている<sup>4)</sup>。

## 2 神の民の聖務

第2の問題はこの世における教会の理解である。この世における教会の使命を考えるにあたって、近年の世界教会協議会の中で、考究されている二つの言葉がある。一つは、神の民 (ラオス) 他は、聖務 (ミニストリー) という言葉である。ニューデリー大会 (1961年) の報告をみると、つぎのようなことばがある。

「今日、すべての教会員は、神の民 (ラオス) と聖務 (ミニストリー) という二つの言葉を回復する必要に迫られている。すなわち、ラオスとは神の民であり、それは勿論按手礼を受けた人をも含めて、この世に生きるすべての

神の民なのである。聖務（ミニストリー）とは、キリスト者がどんなに小さな者であっても、彼のもっている特別の技術や能力を用いて、キリストの名によって、キリスト者である友や、またほかの仲間を助けるすべての働きを意味するのである<sup>5)</sup>。

ここでは、教会に参与するすべてのものが神の民として、それぞれに与えられている賜物をいかして、自分がおかれているこの世の場にあつて隣人をたすけ共に生きることが示されている。このことは、従来から考えられてきた教職者の聖務を否定するものではない。教職者の聖務は、神の民の1人1人がそれぞれの賜物と召しに応じた働きを充分になすことが出来るように、信徒をたすけ、教え、希望を与える者として多くの聖務の中の一つとして、とくに選びわかつていられるのである<sup>6)</sup>。これらのことは、日本の教会でも最近の数年間に可成りひろく論ぜられているところである。

現在世界教会協議会の信徒部においては、信徒論や聖務論の神学的論議が中心となっていない。これらの問題は次第に信仰職制委員会で論ぜられるようになっており、すでに、昨年7月にカナダのモントリオールにおいて開かれた第4回信仰職制会議の第三部門では「職務」の問題がとりあげられている。信徒部の中心的な関心は、しだいに実践的な課題に移りつつある。すなわち、エヴァンストンにおける第3回世界教会協議会の大会において、神の民のすべてが教会の代表としてこの世に遣わされており、信徒のあるところに教会の働きのあることがみとめられた。信徒はキリストの体の1部としてこの世において教会を代表してキリストの聖務にあずかるものであることが確認され、信徒部がはじめて設立された。1961年のニューデリーの会議においては、一歩すすんで、信徒がこの世において働くためには、いかにして信徒の人間形成をすればよいのかという信徒の修練が強調されるようになった。日常生活において生き生きと働くことの出来る信徒をつくり出すために、あつめられた教会はいかなる働きをすべきか、その礼拝はいかにあるべきか、また信徒の交りはどのような姿で形成されるべきかという課題が検討されている<sup>7)</sup>。われわれの属している東アジア・キリスト教協議会の過程からいうと、1959年5月にマレーの首都クアラ

ルンプールで創立大会が開かれたのであるが、このときには、この世における信徒の証の重要性が強調されてた。信徒が世俗の領域において隣人に奉仕し、隣人と一緒に連帯性をもって働くところに、教會の証しがあるということがそのメッセージにもべられている。しかるに、この2月にタイのバンコックにおいて開かれた第2回の大会では、これからの4年間の全プログラムの強調点として「信徒訓練」というテーマがかかげられることになった。この場合の訓練の主たる目的は、信徒が日常の生活において十分な証しと奉仕の働きが出来る為である。現代の世俗世界においてキリスト者が自由人として生きることは容易なことではない。与えられた自由を放縦に用うことなく、この世にあってこの世にならわず、世俗の世界に生きながら世俗主義に走らずに生きることはなみ大ていなことではない。ここにキリスト者が互に日々新らたに生きるものとして、共同の交りの中で支えられ、愛の中にも修練しあうことが必要である。修練 (Discipline) は弟子 (Disciple) にとって欠くことの出来ないものであり、それは人をしてこの世を背にして彼岸にむかわしめるための禁欲ではなく、この世にあって逞ましく生かしめるための内世俗的禁欲である。元来「禁欲」(ascetic) という言葉は「働く」(askein) という言葉からきており、職人がその技術を熟達してよい作品をつくるように励むことを意味したものである。初期の修道院の生活も聖俗を二分したものでなく、辺境の地にあって、新しい文化をきづいてゆくさきがけとなるような逞しい人間を形成して行つたのである<sup>8)</sup>。マックス・ウェーバーは資本主義の勃興期におけるカルビニストたちの緊張した生活態度を「内世俗的禁欲」としてとらえ、歴史を前に進展させていった倫理的エトスとした評価したのである。現在においても、キリスト者の内世俗的参与を可能にする為には、訓練が必要となっている。それは、必ずしも前の時代と同じような形をとらないかも知れない。しかし教會の交りにおいて互に修練のなされないところには、充分な世俗社会での働きも期待されないと思う。

今日、キリスト者の世俗世界への参与をいうとき、多くの人々はボンヘッファーのことを考える。彼はナチスに反抗し、ついにヒットラーの暗殺の計画にまで加つた。彼の獄中書簡のそこそこには、キリスト者が世俗世界にあって宗

教的な言葉や形をとらずに人間として生きることがのべられている<sup>9)</sup>。しかし、その場合、ボンヘッフナーは、キリスト者の修練ということと同時に強調している。彼はとくに、「内に秘められた規律」(Arkan-disziplin)という特別な言葉を用いて、神の民の中における隠された内なる規律について語っている<sup>10)</sup>。それを具体的にしているのが「交りの生活」(Gemeinsames Leben 1938)でありこれは1935年弾圧下に非公認の神学校で25人の学生たちと共同の生活をしたときに書かれたものであり、世俗世界に人間として生きるにあたってその人の背後にある隠れたる共同の規律ある生活についてのべられている。「行為」と「苦難」と「死」という現実世界におけるキリスト者の在り方をうたった「自由への途上の宿駅」という詩は、「訓練」というテーマに基づくつぎの言葉で始まっている。

「汝がもし自由を求めて出で立とうとするなら、汝の欲望と肢体が、ここかしこへと汝を誘い導かないように、先ず汝の感覚と魂を訓練することを学べ。汝の精神と汝の肉体を潔く保ち、置かれている目標を求めて、自らを服従せしめ、かつ従順であれ、訓練の途を经ることなしに、自由の奥義を味わった者はいない」<sup>11)</sup>。

### 3 一致と宣教の体制

周知のように、エキュメニカル運動における一致への話し合いは、最近のローマ・カトリック教会ヴァチカン公会議にも強く反映し、オーソドックス・カトリック・プロテスタント諸教会をつつむ広いひろがりとなっている<sup>12)</sup>。

本年1月19日雪のふる寒い日であったが世界教会祈祷日にあたり、京都のローマ・カトリック、オーソドックス、それにプロテスタントの諸教会の老若男女が約300人あつまり、一致のための祈りのつどいをもった。はじめ、教団の教会にあつまり、オーソドックス、聖公会の会堂を経てカトリックの労働センターに終るといふ巡歴をなしそれぞれのところで一致のために短かい祈りをささげあった。3年前に同じグループが一致の為に祈ろうとしたとき、その表現や概念の理解の相異があつて仲々容易に祈れなかったことを想起して、一致が徐々にではあるが現実となりつつあることを感じさせられた。最後の西陣のカ



トリック労働センターにおけるあつまりでは、1人のカトリックの青年が証しをなし「自分たち過去数年にわたって一致のために祈り求めてきたが、なかなかさしがあられずなかばあきらめかけていた。その時今日の様な会合に出席することが出来て、前途に対して非常に励まされるものがあった」。と率直な感想をのべた。もちろん、教會の一致の努力はこれからなされるべきけわしい途であり、われわれはその端著にいるにすぎないし、伝統や教理において複雑な問題が存しており、あまり簡単な解決を求めるべきでないことも充分承知しておかなくてはならない。しかし、ここで確認しておきたいことはつぎの二つの点である。

一つは、エキューメニカルな働きのなされる最も重要な場は、わたしたちが平素住み、働いている具体的な場であり、そこにおいて主にある一致を追求してゆくということである。「具体的な各人がおかれている場における一致」(Unity in Locality) という主張は、セント・アンドリュースにおける信仰職制会議で強調され、ニューデリー大会ではっきりと認められ、モンリオールの第4回信仰職制世界会議の第5分科はとくにこの問題について討議をした。この場合に「場」は、キリスト者が属している近隣社会、主として彼の住居のある地域社会を意味すると同時に、彼の働いている職場、学んでいる学校、勤めているオフィス、工場、病院など日常生活における具体的な場を意味している。このことは、産業社会におけるキリスト者の在り方を考えるとき非常に重要な意味をもっている。キリスト者の一致が、自分の属する職場や、働いている学校でいかにあらわされているか、自分の住む町で、教派をことにしたキリスト者は、その交りの回復と強化のために心を開いているかどうか、を問うてみる必要がある。今日エキューメニカルであるということは、外国にいった会議に出ることではなく、自分のおかれている日当生活の場において、キリストにある兄弟と新しく出あうことを意味している。

現状における一致の姿から示唆されるもう一つの点は、互に知りあい、学びあう段階から、一つになって祈りあう段階にきているということである。教理的な表現には差異があり、礼典の形態において今すぐに一致を見出し得ないが、一つの御霊の下に祈りあうことは現実に可能となっている。次のステップは互

に宣教において、奉仕において協力しあうということではないかと思う。とくに隣人に対する奉仕の業においては、キリスト者であろうがなかろうがみな一致して協力をなし得る筈である。まして、同じ信仰をもったものは、お互にもっと一致して協力しあえると思う。ヨーロッパにおいてエキュメニカルな対話を推進してきたプロテスタントの神学者の1人は、オスカー・クルマン教授であるが、彼が絶えず強調してやまないことは、この世のなやみに奉仕することを通して、分たれたキリストにある兄弟たちが一致することである。彼はとくに、ヨーロッパにあいついでおきている避難民の救済にローマ・カトリック教会とプロテスタント教会が一致してあたるべきことを提唱している。

キリスト者の一致が促進しない場合、その理由として、お互同志の立場が相異しており、真摯に問題を考えるときどうしても現在では、痛みを賞えつつも即座に一致出来ない場合がある。しかるに、往々にして、キリスト者は、丁度めかくしをされた馬車馬のように、自分の属する教会のこののみを考え、他を理解しようとししないのみでなく、この世に対する教会の責任を充分に考えない場合がある。この様な場合は、この世に対する自分の使命を充分に自覚しないために、既成の自己の殻を守るこののみを考え、新しい一致の道には無関心となつて了うことが多い。教会はキリストを通してこの世にむけられるとき、同労者として新しい出あいを経験するものである。

今日の世俗世界において、貴重な賜物は、ちがった立場の人々、ちがった組織に属する人々、ことなつた国と伝統に属する人々が互に協力するということである。集団の間に協力と一致が仲々達成されないと今日の世界の深刻ななやみがある。この世は、キリストにある兄弟たちの交りにおいて互に一致と協力がなされるかということについて無言の深い関心をもっている。分たれた世界において教会も分裂しているなら、それはキリスト教の宣教のつまづきの石となるであろう。今日の社会においてその結果にまさって、キリスト者が一致してこの世に仕えているという事実そのものが大きな証しであるということが出来ると思う<sup>13)</sup>。とりわけ日本においては、キリスト者はその全人口の1パーセントにも満たない少数者であり、キリスト者の一致と不一致は社会から非常に大きな注目をうけている。われわれは教理の面や礼典の形において短兵

急に一致を強いてはならない。一致は妥協の産物であってはならない。それは自発的に、キリストにたちかえることによって、新しくされ、一つとされることであり、他者を強制的に均一化することではない。しかし、この世界において同時代者の重荷を共に担うという働きにおいては、キリスト者はもっと一致してあたり得るのではないかと思う。奉仕の面で教会が不一致である場合、しばしば、教会は自分の保存のみを考え、この世のなやみを真剣に考えていないことが多いのではあるまいか。

このような観点からわれわれは、世俗化しつつある産業社会の中にあって、神の民として、一致して、証しと奉仕の業にあづかるように努力したいと思う。

(本稿は、1964年1月28日-29日にわたって三重県四日市で開かれたNCC主催の「産業社会における共同の使命」について協議会でなした講演の前半の部分をもとめたものである。後半の部分は現代「日本の産業社会における倫理」を検討したものであるが、続けて次号に掲載する予定である)。

- 1) Walter Rauschenbusch, *A Theology for the Social Gospel*, 1917, p.131.
- 2) Oswald Spengler, *Der Untergang des Abend Landes*, 1918-20.
- 3) Report of the Consultation on the Meaning of Secular, Ecumenical Institute, Bossey, 1962.
- 4) Worship in a Secular Age, *Student World*, No. 1, 1963, pp.88-96.
- 5) 世の光キリスト, WCC 第3回大会報告書, 46頁-47頁。
- 6) エペソ 4: 11-13.
- 7) 世の光キリスト, 48頁以下参照。
- 8) Robert Calhoun, "Work and Vocation in History", in John O. Nelson, (ed.), *Work and Vocation*, p. 91.
- 9) ボンヘッファー, 抵抗と信従, 選集 V, 272頁, 274頁, 260頁, 257頁, 248頁など。
- 10) 前掲書, 188頁, 193頁。
- 11) ボンヘッファー, 現代キリスト教倫理, 選集 IV 1 頁。原文にてらし訳を多少かえた。
- 12) 京都においては毎月1回, 定期的に「エキュメニカル・トーク」という名のもとに1961年からカトリック, オースドックス, プロテスタント諸教派の間で共同の研究と祈りがつけられている。東京, 神戸でも同様な会合がもたれている。Japan Christian Quarterly, には上記について特輯号がある。
- 13) 世の光・キリスト (WCC) 第3回大会報告 96頁。  
ニューデリ大会以後以前の国際宣教協議会 (IMC) は世界教会協議会 (WCC) と合同し, 世界宣教部を構成している。1962年バリーにおける同部門の最初の会議で

は「宣教のための共同の働き」, (Joint Action For Mission) ということばが同部門のテーマとなり, ニュービギン監督によって8頁からなる文章が出されている。また東アジア, キリスト教協議会では1963年2月から3月にわたって, マドラス, シンガポール, 東京の3カ所で地域別にこの問題についての協議会を開き, それぞれの状況における Joint Action の方策について協議した。